

ソルフェージュ教育について

Des Solfèges

その1 幼児のソルフェージュ教育のスタート

瀧野 澄子 Sumiko Takino

横川 美智子 Michiko Yokokawa

楽譜で音楽を伝え、演奏する洋楽では、譜面から具体的な音の高さを想像し、感じとる能力が必要である。声を出すよりも先に、楽器で音を出すよりも先に、その音の持つ高さとその流れが耳の中でひびいていなければ、声楽家や作楽器の奏者は、声や音を出すことは出来ないし、たとえ鍵盤楽器を演奏する場合でも、音を音楽にすることは出来ないであろう。

ではその音の高さを感じる能力、音の相対的な関係を感じ得る能力、即ち音感について考えてみたい。

(1)


音感について

















音感には絶対音感と相対音感があるが、今回は絶対音感について記してみよう。




絶対音感とは“先天的な能力である”との考え方もある様だが、西洋音楽の素材となる絶対音感とは、幼児期（四・五才）から小学校低学年に於て訓練することによってかなり習得することが出来る。ピアノの鍵盤のどこをたたいてもすぐにその音を言いあてることが出来て、一音だけでなく、幾つかの音が一緒に鳴っても、同時に鳴ったそれらの音を正確にとらえ、言いあてることが出来る子供達がいる。絶対音感とは、ある音の高さを絶対的に記憶することである。他の音との比較関係からその高さを感じるのではなくて、一音一音が持つ絶対的な高低を判別するのである。そしてその記憶が一時的なものではなくて、永久的に音名として記憶されることである。

では次にその絶対音感をつける一つの方法を書いてみる。

A. 和音のもつひびきとそのちがいを正しく記憶させる

- ① 先ず基礎的な和音  を一つピアノで弾いて、その名前とひびきを覚えさせる。
- ② ①の和音がよく耳に慣れたところで、全く種類の異なる和音を弾いて、①の和音とひびきがちがうことを認識させる。

- ③ ①とひびきが異なる和音を幾つか弾いて、時々その中へ子供がよく知っている①の和音を混ぜて、沢山ある和音の中から、①の和音だけを正しく聞き分けて取り出せる様にする。
- ④ ③の練習が進んだら、次に①の和音のすぐそばにあって、少しひびきのちがった和音  を入れてみる。(この時  の名前は教えないこと。 とちょっと似ているが、 ではない！ということをはッキリ耳で聞き分けられなければならない。)初めのうち子供はとまどうが、ややこしくなってきたらすぐ新しい和音  は止めて、③の練習に戻る。そして①の和音をより一層確実に覚える様くり返す。諺に“急がば回れ！”というのがあるが、音感教育は決して急いではならない。生徒のちょっとした混乱も見過ごしてはならない。先生は生徒の混乱の原因、出来ない要素をしっかりとらえて、生徒が完全にそのひびきを記憶するまで反復、訓練しなければならない。
- ⑤ 以上の練習をくり返しくり返し、根気よく続けて  と  の区別がハッキリわかる様になったら初めて  の名前を教える。そして、 と 、その他の種類のちがった和音も加えて、沢山の和音の中から、 と  の二つの和音だけは、いつも正確に取り出せる様にする。
- ⑥  と  が他の和音と混乱することなく、正確に聞き分けられて、覚えられたとみたら④の要領で  を加え、生徒がひびきのちがいを十分に記憶したら  の和音名を教える。(⑤と同じ)

この様にして和音の数を段々増やしていくのであるが、上記の三つの和音が正確に聞き分けられる様になるには、二ヶ月から三ヶ月かかる。勿論年齢差、本人の音楽経験等によって個人差が出てくる。又週一度先生のところでこれらのひびきを聞くだけでは、小さな子供にとって、習ったことを思い出すだけでも大変で、とても覚えることは出来ない。特に年齢が低いと集中力も短時間であるし、なかなか週一回のレッスンでは微妙なひびきのちがいが等、覚えることは出来ない。何の訓練でもそうであるが、特に音感訓練は思考能力とは余り関係のない微妙な判別能力であるから、毎日のくり返し、反復訓練による他、方法はないと思う。子供達の短い集中力をつかまえて、朝、昼、晩と、たとえ10分でも15分でも一日に何回かくり返し聞かせることによって、子供達は自然に覚えていく。又この音感訓練は子供達にとって苦痛であってはならない。音を覚える、音の遊びであってよい。幼い子供が赤、黄、青と色を習う様に、 は赤、 は黄、 は青という様に、色をみてすぐ反応する如く、音を聞いてすぐ反応する様になるまでくり返さなければならない。目につく色の名前を次々覚えて表現を豊かにしていく様に、子供達はどんどんひびきで覚え、記憶して音感を豊かに育てていくのである。

B. 耳でとらえた音を正しく唱わせる

以上、基本的な和音から始めることを記してきたが、同時に、耳でとらえた音を一音ずつ声を出して高さを唱いながら覚えることも進めていかなければならない。小さな子供達が文字を覚える様に、五線が下から数えて五本あることを教え、その線の上と、間に「」の符頭をのせて、「ドレミファソ」であることを教えていく。ハ音は加線があるので、声域が低いので、ホ音から教える先生もあるし、ト音から教える場合もあるし、又教則本の初めに出てくる音から教える時もある。いづれの音から教えるにしても、この訓練方法は、読むことよりも、書くことよりも先に、その音の持つ高さを覚えさせることが大切である。そしてピアノでポンとその音をたたきただけでなく、先ず先生がその音の正しい高さを声で出して唱って聞かせることである。ハ音なら「ドードー」、ホ音なら「ミーミーミー」と二つないし三つ続けて唱って聞かせ、生徒にすぐ同じことを反復させる。音名、階名だけでなく、その高さに言葉をつけて唱わせてもよい。同音が上手になったら、二度の上行、下行、そして三度という様に、段々音程を拡げて、音が上に行ったか、下におりたかも判断させる。この時先生が声を出さずにピアノで弾いて、それを子供に唱わせ様とするのはダメ。未だ子供達には、音の名前と高低が頭の中で結びついていないのであるから、声の出し様がないのと、たとえ音階名をとり去って、「ラララ」で唱わせるとしても、ピアノの音の絶対的な高さが記憶出来ない子供には不可能なことである。子供達は大人を真似ることから物を覚えていく。声を出す為には、人の声を聞いて、その通り真似ることが一番やさしい。勉強が進んできたら、「ドレミファソラシド」とハ長調の音階を耳に慣らして、正しく唱える様に導いていく。この様にしていくと大抵の子供達は絶対音感を身につけていくのであるが、ソルフェージュ教育にとっては、音や和音の名前がすばやく答えられるとか、和音をいくつ知っているかということは音覚であって、それ自体が目的ではない。主な目的の一つは、音を感じ、その高さを肉声で作り出すことが出来るということであり、これが音感である。

次にリズムについて少し記してみたい。





(2)





リズムについて

唱える音、音程が増えてきたら、次にリズムを教える。


- ① 一拍のリズム（長さ）を教える。
- ② 一拍を二等分に感じること。(1ト2ト、という様に、「ト」の意識をあいまいにしないこと)

③ 空間、即ち休符の一拍を同じ様に（1ト2ト、の「ト」を）しっかり音楽の流れの中で感じとれる様に教える。(休符は休めノではない)

④ タン（あるいはタア）＝、ウン＝、ターアー＝、タタ（あるいはティティ）＝、
という様に音の高低はなしに、リズム譜に言葉をつけて、両手で打つのである。最初は $\frac{3}{4}$ 拍子か、 $\frac{4}{4}$ 拍子を使って、一小節ぐらいのものを先生が打つのをよくみて、すぐに真似させる。

⑤ 初めは一小節覚えて真似ていたのが、二小節、三小節、四小節と段々多く、長く覚えられる様になり、リズム譜の色々な組合せに慣れてきたら、タン（あるいはタア）＝、ウン＝、ターアー＝、タタ＝、であるとリズム譜を教え、一拍、二拍、 $\frac{1}{2}$ 拍、の感覚を認識させる。

⑥ リズムは頭や手足の先だけで覚えるものではない。全身で受け止め、感じ、身体全体が反応するものでなければならない。子供の反応をよくみて、次はリズム譜に音をつけて、音の高低を唱いながら、リズムも正確に打てる様にする。

その時、メロディーが音階に基づいてある様に、リズムにも理論がある。二等分されれば最初の音にアクセントができ、三等分されれば最初の音にアクセントが出来る。先生は生徒に真似させるべく音＝高さ、を出すにも調性を持たねばならないと同様に、リズム打ちをする場合にも、三拍子は“1 2 3”、四拍子は“1 2 3 4”の拍子感をハッキリ感じて範唱出来なければならない。又八分音符はである。(但し、余り強弱の差は多くない方がよい)

以上のことは、初めて音感教育を受ける子供達への導入の仕方であるが、全ての子供に完璧な絶対音感がつくというものではない。では色々な理由によって完璧な絶対音感を身につけることが出来なかった子供達は どうしたらよいのであろう？

(3)

完璧な絶対音感がつかなかった子供達へ

初めにも書いた様に、音感には絶対音感と相対音感がある。相対音感とは、音の高低の相対的な関係を認識し、その関係を記憶、判定する能力をいうのであるが、人間は元々、相当発達した相対音感を持っていると考えられる。それがあるから音感訓練を受けない人でも音楽を楽しむことが出来るのである。不幸にして(?) 完璧な絶対音感のつかなかった生徒、又中途半端な絶対音感しかつかないであろうと思われる生徒は、すみやかに本来持っている能力の開発、即ちより高度な相対音感教育に切りかえるべきである。音の相対的な関係を充分に感じる能力、相対音感を鋭くとぎすますことにより、子供によっては、絶対音感のみを

持っている者よりも、より音楽的に育てられる場合がある。先生はある時期に完璧な絶対音感が見つからないノと見極めたら、すみやかに相対音感に切りかえる勇気を持つべきである。この相対音感教育については次回に譲ることにしよう。

子供達は音のひびきを聞くことに少し慣れてくると、文字や色を覚えるのと同じ様に、旺盛な吸収力でどンドン音を覚えていく。しかし絶対音感をつけることが=音感教育の全てではない。絶対音感を持っていることは、大変便利であるが、絶対音感と音楽性といわれるものは別である。

豊かな音感に、更に諸要素が加わり、音楽的な感受性を豊富にすることと、音楽の構造を意識的に、より正しく理解する能力を発展させる土台となるべきものがソルフェージュである。

